

マイノリティと権力

—タイ北部山地民リスの村長とその「尖鋭的分節」についての
覚え書き—

綾 部 真 雄

I はじめに

リスの村長は殺されやすい。90年代の初め、本格的にタイ山地民リスの調査を始めたばかりの頃に知人の研究者に聞かされたこの言葉は、当時の私に強い印象を残した。真偽こそ定かではなかったが、正面からその命題と向き合っても、なぜそうなのかがすぐには理解できなかったからである。タイという国家の中で甚だしく周縁化されたかにみえる少数民族の村長位が、生死を左右するような権謀術数の世界とは無縁に思えたし、数多あるエスニック集団の中で、なぜ「リスの」という形容詞がつく必然性があるのかも分からなかった。

その後、タイ・リスと麻薬ビジネスとの浅からぬ関係を知ることとなり、また、村落レベルで頻発する殺人を目の当たりにするにつけ、リス社会の暗部でもつれ合う諸事象の結節点に、多くの場合村長がキーパーソンとして位置するという構図がおぼろげながら見えてきはした。だが、私自身の研究上の関心がエスニック・アイデンティティや国籍法、セキュリティ論などへと比重を移していくと同時に、この問題は私の中で長らく捨ておかれた。

それから十余年を経た2008年9月4日、タイ北部チェンマイ県内のあるリス村落において、同村落の歴史が始まって以来初の村長選挙が粛々と行われた。「初の」と書いたのは、同村は長らくの間タイ国統治法上の正規村ではなく、隣接するタイ人村落の衛星村として位置づけられてきたため、正規の村長を選挙で選出した経験がなかったからである。それまで「村長」と呼びならわされてきた人物たちは皆、単なるナチュラルリーダー、もしくは上位レベルの行政単位の長の補佐としての立場にあったに過ぎない。だからこそ、この選挙は村民の多大な関心を集め、村全体がこれまでになかった異様な雰囲気と熱気に包まれた。

一方、選挙から選挙後の祝宴にいたるまでの一部始終に立ち会ったことで、長らく眠っていた「リスの村長」についての私の関心もまた再び首をもたげてきた。時に命を賭すような状況に追い込まれながらも、村長であり続けることのメリットと

は一体なんなのか。山地のマイノリティ社会と平地タイ人社会、あるいはタイ政府とをつなぐ位置にいる村長は、村内に何を媒介しうなのか。村長をめぐる権力の構図は、90年代初めから現在にかけてどのように変化してきたのか。

本論は、これらの点に答えていくための覚書的な試論である。相対的な自律性を持った政治空間としてのマイノリティ村落が、国家レベルの権力のヒエラルヒーと接合する時に起こる現代的な諸動態を後景としつつ、以下、「リスの村長」について多角的に検討してみたい。なお、タイ語とリス語のフォークタームが錯綜するため、混乱を避ける意図で、タイ語についてはローマン体、リス語についてはイタリアック体でそれぞれ記すこととする。

Ⅱ リス特殊論の位相

1 リスについて

タイの北部には、政府に「山地民（チャオ・カオ chao khao）」もしくは「山地タイ人（チャオ・タイ・プーカオ chao thai phu khao）」として公的に認知された10程のエスニック集団がある。現在ではもはや山岳部に住んでいない人々も多いが、その大半がかつては山で焼畑移動耕作を営んでいた名残で、今でも「山地民」と呼びならわされている。もっとも、現代の山地民のなかには「チャオ・カオ」というタイ語が含意する後進性や若干の侮蔑的なニュアンスを嫌う人々もあり、彼らは率先して自らを「先住民（チョン・パオ・プーンムアン chon phao phuun muang）」と呼ぶようになってきている〔綾部 2008〕。本論で対象とするリスもまた、こうした「山地民」もしくは「先住民¹⁾」と称される人々のなかの一集団である。

ところで「リス」とは、主として中国、インド、ミャンマー、タイの4カ国にまたがって住む民族の総称であり、100万内外の人口を持つと推定されるリス全体からみれば、タイに住む人口は約4万とさして多くはない。伝承上は、1918年にミャンマー側から国境を越え、現チェンライ県メースアイ郡付近に最初の集落を構えたとされる。その後リスは北部タイのチェンマイ県、チェンライ県、メーホーンソーン県の3県を中心とする10県ほどに広く展開して住むようになり、現在、政府統計上（2002年時点）は155村がリス村として計上されている。

「山で焼畑農耕に従事するアニミスト」で、信仰体系と親族組織の両面で漢族文化の影響を色濃く受けているというのが従来のステレオタイプ的なリスのイメージだが、現在のリスはそうした安易なイメージで括ることが意味を持たないほど多様化している。そもそも、山に住まず平野部の町や都市部で種々の賃金労働や観光業に従事する者が増加の一途を辿っているだけでなく、90年代以降は、出稼ぎや婚

姻によって国外へ移動、移住する者も後を絶たない。信仰の面でも、60年代に入ってからOMF（国際福音宣教会）等によって本格的に開始されたキリスト教の布教によって改宗した者、やはり60年代半ばからサンガ（タイ仏教の全国組織）が進めてきた上座仏教の布教によって仏門へ入った者も少なからずいる。その一方で、本来のリス的な価値（yili）の求心力が失われていることを危惧する声を背景に、2002年頃からは、NGOや地域のオピニオンリーダーを中心として大規模なリス伝統文化・芸能祭が年1回のペースで行われるようになってきた。消費社会への移行と伝統への回帰との相克という、世界各地で繰り返されてきた普遍的な葛藤のパターンが、タイ・リスにもワントンボ遅れてやってきた感がある。

本論の論旨との関係でいえば、麻薬経済への深い関与²⁾と、一見近代化とは逆のベクトルを持つようにも見える種々の儀礼的实践への執着は、現代のリスを理解する上での必須事項であるが、これらについては必要に応じて適宜触れていくこととする。

2 タイ・リスの描かれ方

タイの山地民を構成する各々の民族のイメージは一枚岩ではない。山地民とあまり接点を持たない一般のタイ人はすべての民族を十把ひとからげで考えていることが多いが、山地民をよく知る政府関係者、開発関係者、NGO、研究者などの間では、民族別に特化した個別のイメージがある程度共有されている。たとえば、「森との共生に長けた」カレン、「商売上手で企業家精神にあふれた」モン、「貧しいが素朴で純情な」アカといった具合である。そして、リスについては「プライドが高く、競い合いを好む」という評価を耳にすることが多い。

これらを根拠を欠いたまま本質化された虚像として切り捨てることも可能だが、その相対的な正しさについては検討する余地があろう。ここでは、その「正しさ」の背後にあるものを、一定の時間を経て文化的に醸成された、個々人によってその多寡を変えながらも緩いレベルで共有されているメンタリティ・モデルとして暫定的に位置づけておきたい。ただし、リスならリスのそうしたモデルは、リスに固有のものというよりは、隣接諸集団にも適用できるものだと考える。それは、エスニック集団の枠を越えて共有される多くの弁別特性のうちのひとつのようなもので、他の特性と相俟って層をなす。したがって、リス個人間で濃淡の差をみせるのみならず、エスニック集団間にもまたがって濃淡のグラデーションを描いている。

ともあれ、私は「リスらしさ」とでも呼べるものの存在を留保付きで肯定するにやぶさかではなく、そうした「らしさ」と、冒頭で述べた「リスの村長は殺されやすい」という命題とはなにがしかの相関にあると考えている。「プライドが高く、競い合いを好む」というだけではあまりにも粗雑な一般化かもしれないが、他者の

後塵を拝すること、他者の支配下に置かれること、あるいはより端的には“負ける”ことをリスの人々が非常に嫌うのは、少なくとも自らの調査における経験則からは確かなことに思える。ただ、いくら負けを嫌ったところで、現実には勝敗が顕在化する局面が多い。儀礼執行の主導権、土地獲得競争、作物の収穫高や売買益の多寡、投票などにおいて、敗者はいたるところに存在する。敗北はいとも簡単に嫉妬や羨望、さらには憎しみへと転化され、社会関係の中に争いの種を播いていく。このことから、任意のリス男性が通常の人生において到達し得る最高の政治的地位である「村長」位が、潜在的な争点になりえることは容易に想像できよう。

もっとも、ただそれだけのことならば研究者一個人の雑感に過ぎないし、また、他の山地民とリスとの相違を論理的に説明したことにもならないが、無視し得ないのは、他の多くの研究者もまたリスにみられるそのような特質を様々なかたちで指摘していることだ。「リス特殊論」とでも呼べそうな一連の議論の流れが着実にある。時系列的に見ると、まずドゥサン [Dessaint 1971: 337] は 1960 年代に遡って高圧的な村長の存在を忌み嫌うリスの人々の傾向性について触れているし、デュレンバーガーは、特定の権威に依拠せずに紛争を解決しようとするリスの人々の平等主義的な姿勢が、却って紛争をこじれさせるケース [Durrenberger 1976] について詳しく述べている。ちなみにドゥサン [1972: 342] は、リネージに代わって儀礼や生業活動における協働を支えるリス村落内のリネージ横断的な連帯を相互依存集団 (allegiance group) と呼んでいるが、これを受けたデュレンバーガー [1983: 217] も、「各リネージは特定の土地を支配せず、その権威の依代を持たず、またいかなる重要な経済的もしくは政治的な機能も持たない」としてドゥサンの見解を裏書きし、リネージの機能不全と非階層性をリスの紛争解決が出口を見出しにくい原因として同定した。人類学者でもあるバプティストの宣教師ルイス [Lewis and Lewis 1984: 241] はさらに、リスの端的な特徴を「優越の欲求 (desire for primacy)」と表現すると同時に、「リスは常に一番になりたがる」と述べ、過剰な競争原理が暴力へとつながりうる可能性を示唆している。

デュレンバーガー [1989; 1996] は、後にさらに考察を深めてもいる。彼は、リス社会の平等主義的な性格を東南アジア大陸部における山地社会と平地社会とのダイナミックな連続性に置き直して考えるなかで [cf. Kirsch 1973]、「権力 (power) は適切な行動と気前の良さに由来し、気前の良さは富に依存する」[1989: 106] としつつ、儀礼 (饗宴) を通じた「気前の良さ」の文化的表現こそがリスの諸村落における人々の権威や権力を担保し、そうした儀礼を主催するのに必要な富へアクセスできる機会の均等性こそが、平等主義の揺籠たりえてきたと論じた。

さらに近年では人類学者のヨンスン [Jonsson 2005: 95-96] が、自らが研究するミエン³⁾とリスとを比較する上で、リスの村長の「殺されやすさ」について一定の

紙幅を割いて言及している。彼はその真偽の同定からは距離を置き、そうした言説は、コミュニティ全体を統括する中心的な権力を否定し、世帯の中心性を際立たせるためのレトリックとして有用であったからこそ流布したのではないかと考察した。

さて、これらの分析に共通しているのは「競争原理に裏打ちされた、突出した権力の否定」という社会的な文法の切り出しだが、こうした見方を牽制する向きもある。かつて山地民研究所の所長を務めたプラサート [Prasert 1989] は、リスをあたかも「アナーキスト」であるかのように評す風潮を批判すると同時に、そうした安易な断定が、年長者や種々の宗教的職能者といったリス村落内の権威者の存在を等閑視していることを指摘する。だが、そのプラサートですら、平等主義、個人主義、プライドをリスを理解する上での重要なキーワードとしており [1989: 189]、その観点から、参加者間の地位の不均衡を顕在化させるたぐいの開発事業がリスの人々との間に重篤な摩擦を起こす可能性を危惧している。リス的な特性 (i.e. 平等主義など) をある種の資質として肯定的にとらえるか、タイ社会への適応にあたっての阻害要因として否定的にとらえるかの差異はあれ、結局はプラサートも他の研究者らと同様のメンタリティ・モデルを抽出しているように思える。

ところで、「富への平等なアクセス」が個人間の権力の均衡や平等主義の源泉であるとするデュレンバーガー説が正しければ、アクセスにまつわる不均衡が生じたときには、平等主義的な政治体系もまた崩壊の危機にさらされることになる。そして現在、まさにそうした状況が生じようとしているかにみえる。各々の世帯で栽培が可能なケシを原料とするアヘンとヘロインが主要な換金作物であった時代には、マンパワーと勤労が富を保証していた。しかし、その2つが事実上市場で影をひそめ、代わって、国外に主要生産基地を持つ、化学合成による覚醒剤 (メタンフェタミン) が主流となったいま、富へのアクセスは個人の才覚と麻薬流通ネットワークとのパイプの太さに大きく左右されるようになってきている。一定のリスクを負う覚悟さえあれば、末端の売人として参画することは誰にでも可能だが、各個人が流通過程のどの段階に位置するかによって、蓄積できる富とそれに付随する権力の大きさには開きがある。特に、覚醒剤による麻薬汚染が猖獗を極めた 90 年代には、一部のリスが巨万の富を蓄積して自らの村落における独占的な覇権の確立に成功したほか、なかには、行政村や郡を牛耳る「麻薬王」として君臨するケースすらあった⁴⁾。そして、その多くは「村長」でもあった。

Ⅲ 「村長」という変数

1 村内の政治的リーダーシップ

現在、比較的定着の歴史が長いリスの村（村区）を訪れると、概ね次のような「顔役」たちに出会うことになる。まず、村長（phuuyaibaan）とそれを支える村長補佐（phuu chuai phuuyaibaan）が2名（行政担当／保安担当）おり、村内委員が5名から10名程度、村の状況に応じて任命されている。村によっては、村区の上位単位である行政村（tambol）の行政村長助手およびタンボン行政機構の評議員が村内から選出されていることもある。一方、伝統的な領域にあっては、祭司であるモム（*momu*）が村の守護神の祠を世話しつつ、儀礼や種々の慣習的实践における中心的な役割を果たすほか、ニバ（*nyipha*）と呼ばれるシャーマンが、小さな村なら1、2名、大きな村であれば5、6名程度おり、一定の発言権を行使しうる立場にある。さらには、村内の有力リネージの年長者やリス的な伝統（*yili*）を熟知する傑出した個人が、「長老（*tsomu*）」の名のもとに尊敬を集めているのが普通だ。

こうした人々の中から富や権力の独占者が出ることはめったになく、村内政治は、特定個人に収斂される強いリーダーシップを欠いたままの権力の拮抗状態、あるいは平衡状態にあることが多い。村長が重要な職位であることは確かだが、その村長として高圧的に人々を支配するようなことは避け、あえて対外的なスポークスマン程度の位置に自らを置くのが賢明だと考えられている。その意味では、デュレンバーガーの言う「平等主義」は今なお健在だといってよい。ただし、前章の最後でみたように、富へのアクセスの不均衡が顕在化しているような村では、政治的平衡が破られ際立った権力者が誕生するケースもまあり、リスの平等主義は、新たな局面を迎えているようにも思える。

もっとも、これは単線的な変化ではなく、歴史的な振幅の中での「ゆらぎ」と捉えられるべきものかもしれない。1900年代から1960年代にかけ、強いリーダーシップを伴うリスの首長の事例が散発的に報告されていることから、少なくとも、リスが常に平等主義的な政治体系を維持してきたわけではないことは明らかである。たとえばフォレスト [Forrest 1908: 261] は、現在の中国南西部にあたる地域の一部のリス村落が、かつて相応に強い影響力を持った首長を抱えていたことを報告しているし、ローズとブラウン [Rose and Brown 1911: 264] によれば、サルウィン河上流域のリスには、複数村を支配する世襲制の首長がいたという。また20世紀初頭のタイにあっても、現チェンマイ県ファーン郡にあたる地域で、やはり世襲制の首長の存在が認められたほか [Seidenfaden 1967: 118]、1920年代から1940年代にかけての現チェンライ県のメーチャン郡には、中央政府から貴族の称号を授

与され、複数村にまたがる徴税権を得ていた人物がいたことが分かっている[Hanks and Hanks 2001: 84-89]。

ところで、ここまで「村長」と「首長」という言葉をあえて使い分けてきたのは、両者に時代の差のみならず、意味や立場の差を反映させようとしたからである。リスの人々がかつての首長と現代の村長の双方にフワトゥ(*xwatfu*)という言葉当てはめるが、フワトゥとは現在のようにリスがタイの国家行政に組み込まれる以前から使われていたリス独自の伝統的なリーダーシップを指す言葉であり、法に則った自治体の長としての村長を指すタイ語の行政用語であるプーヤイバーン(*phuuyaibaan*)とはそもそも大きく異なる。にもかかわらず、リスがプーヤイバーンをもフワトゥと呼ぶのは、リスの諸村落がタイの地方行政制度に包摂されたときに、従来のフワトゥが便宜上そのままプーヤイバーンを兼ねることになったケースが多かったからに過ぎない。実際、村によっては、ナチュラルリーダーとしての既存のフワトゥとは別個に、タイ語に長けた若手のプーヤイバーンを立てることもよくあり、いわば「村長が2人いる」という状況が生じることも少なくなかった。また、慣例上プーヤイバーンと呼びならわされている場合でも、その人物が地方統治形態法や公職選挙法に基づいた正規の選出過程で互選されていない、暫定的なリーダーの位置に甘んじていることもしばしばであった。

翻って現在、あるいは90年代の後半あたりを境に、フワトゥと正規のプーヤイバーンが同一の人物である村落の比率が徐々に高まりつつある。それは、タイの地方行政制度における末端レベルでの整合性の高まりであると同時に、マイノリティ社会の「小さな権力システム」と国家レベルの「大きな権力システム」との接合の促進でもあった。では、2つの権力システムの接合は、リスの村長をどのような地位として新たに定位していくのだろうか。次に、このことをタイの地方行政制度との関連において考えてみたい。

2 地方行政のなかのリス村落

「山地民の村」という表現を用いる場合に気をつけなければならないのは、一定数以上の家屋の集合体としての「村」という一般的な通念と、タイ統治法上の正規の「村」という概念とではおよそ意味が異なることである。敢えて日本語で表記するならば、前者は「集落」と表したほうがより実態に近く、山地民の村の多くは法律上の正規村では無い場合が多い。若干古いが、1997年の統計(旧労働社会福祉省公共福祉局山地民福祉事務所)によれば、政府の把握下にある山地民村落3,747カ村のうち正規村は1,651ヶ村(約41%)で、残りの2,096カ村はいわゆる集落到過ぎなかった。母集団のカテゴリーが異なるので単純な比較はできないが、同様の趣旨の近年の統計(2002年度)でも正規村率は45%であり、徐々に増えつつは

あるようだが、現時点ではまだドラスティックな変化はないとみてよいだろう。

タイの山地民は、他の多くの国の少数民族のように同一のエスニック集団だけで特定の地域を占有していたり、特定の行政区画を割り当てられているということもあまりない。異なるエスニック集団の村（集落）が隣り合いながら、あるいは一般のタイ人村の間に埋没しながら、広く山間部に展開しているというのが最もよく見受けられる光景である。そしてこれらの村々が実に複雑なタイの行政システムによって取り込まれている。

話を一度マクロなレベルに戻すが、一般にタイの行政は中央行政（suan klaang）、地方行政（suan phuumi phaak）、地方自治（kaan pokkroong thoongthin）の3種類からなるとされている。中央行政とは国家の中核を担う様々な省庁の編成および命令系統を、地方行政とは県（changwat）、郡（amphoe）、行政村（tambon）、村区（muubaan）からなる、全国を覆う行政の入れ子的システムをそれぞれ指す。さらに地方自治とは、バンコクやパタヤといった特別に指定された都市を除けば、県を分かつ郡の内部にある高い人口密度を持つ中心的区域としての「市」（theesabaan）における行政のあり方を指している。

このうち、末端に位置する山地民の村々に直接的に関わってくるのが地方行政である。しかし、地方行政とは名ばかりで、その実態は「中央省庁の出先」（赤木 1994:225）に過ぎない。県知事および郡長はすべて中央の内務省統治局から派遣された役人であり、県民や郡民の意志を反映した民選首長ではない。行政村の村長（kamnan）と村区の区長（phuuyaibaan）は村民間の互選で決めるが、これらの単位も、地方自治体というにはあまりに中央政府から委譲された権利が少なかった。ただし、「政治的権限の分散」を明確に謳った 1997 年の新憲法布告以降は、後にみるように状況にある程度の変化が見られる⁵⁾。

新規の移民のみからなる村落でもない限り、山地民村落はすべて、理論上はタイ地方行政でいうところの村区（ムーバーン）を形成するか、もしくは任意の村区に含まれるかたちで存在している。より厳密に言えば、それらは「正規村（baan phoo roo boo）」と「衛星村（baan booriwaan）」とに二分される。簡単な説明を加えておこう。

①正規村（baan phoo roo boo）

タイ人村であるか山地民村であるかに問わず、通常ムーバーン（村区）と言えば、この正規村のことである。ポー・ロー・ポーとは、「法律」（憲法に次ぐ優位法）を意味するプラ・ラーチャ・バンヤット（phra raacha banyat）の頭文字を表すタイ語であり、バーン・ポー・ロー・ポーとは、法律上の基準（人口規模、近隣の正規村からの距離、村民の国籍保有率等）をすべて満たしていることを政府

によって認定された村を指す。必ず正規の村区長（＝村長）が存在する。正規村にもまた2つの型があり、単独の集落が1つの村区を形成しているものと、複数の集落が寄り集まって1つの村区を形成しているものとに分かれる。後者の場合には、複数の集落のうちのどれか1つ（通常は最大規模を持つ集落か、最も古い集落）が必ず中心村（baan lak）として機能しており、その集落に村区長（phuuyai baan, phoo luang）がいることが多い。中心村は単独でも村区足りえる可能性があるが、それ以外の集落は単独で村区を名乗るには規模が小さすぎ、公式統計上の分類では「集落（klum baan）」という名称で呼ばれているほか、日常レベルでは「小村（baan yoi）（yom baan）」などと称されているケースも多い。

②衛星村（baan booriwaan）

他の正規村に従属したかたちの小集落で、それらが単独ではまだ村区としての法的認定を受けていない時にこのように呼ぶ。衛星村の住民でも、条件を充たしていれば当然被選挙権があるので、村区全体の村長が中心村ではなく衛星村にいるケースもごく稀にある。しかし、衛星村が独自の村長を持つ法的権利は無く、仮に特定の人物が村長と呼ばれている場合でも、村長助手やタンボン行政機構の委員といった、「集落内でもっとも高い役職に就いている人物」か「慣習的村長」をそのように呼び習わしているケースが大半である。衛星村である以上、他の正規村に法的に従属しているわけだが、その正規村が同一のエスニック集団の村落である場合、他のエスニック集団の村落である場合、一般のタイ人の村落である場合、の3つが考えうる。比較的新しく形成された集落であることが多く、相応の時間の経過とともに一定の法的条件を充足しさえすれば正規村として新たに分立することができる。

先の統計（1997年度）によれば、リスの場合には、全体に占める衛星村の比率は約57%（正規村69村／衛星村92村）と相対的に多い。衛星村には、仮にフワトゥ（伝統的なリーダー）はいてもブーヤイバーン（正規の村長）はいないために村区内でのその発言権は弱く、村区へ入ってきた外部予算の配分も寡少なものになりがちである。何度選挙を行っても、絶対数の上で優位な正規村の有力者に勝てるケースは少なく、なかんずく周縁的な位置に甘んじることになる。村長と同時に村長助手や各種委員もまた村民の互選で選ばれるため、そうした助手職（有給：公務員扱い）や委員職（無給）に衛星村内のリスが指名されることもある。しかし、そうした人々の職権は非常に限られたものであり、村政に深く関与できるわけでは必ずしもない。また、比較的自由性の高いタイプの衛星村においては、各種委員は衛生村内の村民のなかだけで自己完結的に選出されるが、このような委員は村区全体の村政においては役割を持たない。ところが、1999年に全国で一斉に始まったタ

ンボン行政機構の設立以降（移行措置は1995年に開始）、徐々に様子が変わってきた。小さな衛星村内のリスの声が、徐々に村政に反映される機会が増えてきたのである。

従来のタンボン評議会では、その議長たる行政村長（カムナン）のみが立候補した村長のなかから村民による直接選挙で選ばれ、行政村長助手（sarawat kamnan、カムナンが指名権を有する有給の公務員）を除けば、その評議員には行政村（タンボン）を構成する各村の村長等が自動的に就任する仕組みになっている。それに対し、タンボン評議会とは別個の独立法人として設置され、予算の審議を中心に行うタンボン行政機構は、議長と複数の評議員の双方を選挙で選ぶため、リス人口が多い地域ではリスが委員に選出されることが増えてきた。タンボン内部の各村区から任期4年の評議員を2名ずつ選出することになったため、正規村であれば必ず2名の評議員を輩出できるし、衛星村であっても、村区全体に占める人口比さえ小さくしなければ、正規村の候補を押しつけて当選することも可能になったのである。事実、多くのリスが選挙に打って出るようになり、そうして選出された評議員の存在により、タンボンの予算が以前よりも多くリスの村落に入ってくるようになった。特に目立つのは、村にいたる山道の舗装費といったインフラ整備費用、各種の文化イベントに対する補助金の獲得であろうか。統治と予算の審議権を二元化することによる権力の分散が所期の目的であったにもかかわらず、現在ではタンボン行政機構自体が新たな権力闘争の温床となっているという批判もある。だが同機構の誕生は、多くのリスの村落経済にとってはどちらかといえば肯定的な変化をもたらしたようだ。

3 「村長」をめぐる葛藤

他方、村内における政治状況はこれらの一連の変化によって一層複雑な様相を呈しつつある。正規村であるか衛星村であるか。村内にタンボン行政機構の評議員が存在するのかしないのか。フワトゥとプーヤイバーンが別個に存在するのかあるいは同一人物が双方を兼ねるのか。クランやリネージ間の対立が村内政治にどの程度の影響力を持っているのか。こうした種々のファクターの相関は、村内に一触即発の緊張関係をもたらすこともあれば、流れによっては、特定の人物への権力の集中の呼び水となることもある。

私自身も、調査の過程で村長の座をめぐるトラブルには数多く遭遇した。詳細な事例の提示は次章に譲るが、ここではごく簡単に、90年代に起こった典型的なトラブルの事例をまず2つだけ紹介しておく。

■事例1

チェンマイ県ウィアンヘーン郡内のL村は有に50年以上の歴史を持つ村で、タイにおけるリスの移住史を語る上で非常に重要な位置にある。ミャンマーからのリス移民の多くは、いったんL村に逗留し、そこから新たな農地を求めて県内外の様々な土地に散らばっていったという。だが、平地の市場からは遠いその立地の悪さがたまって開発は遅れ、長らくタイ人村の衛星村としての位置づけにあった。そうしたなか、ようやく1996年になってから正規村として分立するための認可が郡から降り、あらためて正式な村長を選挙で選出することとなった。

L村内ではYakya（漢族起源の楊姓）とBiapha（蜂をトーテムとするクラン）が2大勢力を誇っており、それぞれが候補を立てて選挙を戦うこととなった。Biapha側の候補（A）は村内に長く住む男性で資格上なんの問題もなかったが、Yakya側の候補（B）は、実際には別のリス村に本拠を構える男性である。L村内に多くの親族がいること、L村の至近に数年前に広大な農地を買い取ってそこで農業を続けていることを理由に出馬する運びになったため、村内では、Bの村長としての相応しさに関する議論もかまびすしかった。しかし、その旺盛な企業家精神と儀礼的知識の豊富さによってタイ・リス社会で一目置かれている存在であっただけでなく、地方統治形態法第12条で定める「該当村区に住民登録をして住民登録証に名前を記載されてから最低2年以上を経ている（第3項）」こと、「義務教育を修了していること（第15項）」という最も重要な要件2つを充たしていることから、表立って反対するものもない。また、この地区のカムナン（行政村長）がBを強く推していたことも、Bの立候補の正当性を後押しした。両候補は選挙に先立って宴の機会を持ち、どちらが当選しても村政に尽力することを約束し合う。

選挙にはBが勝利した。ところが、「外部者」に負けたAはやはり諦めきれず、Bの出馬資格の洗い直しを始める。その結果、Bの初等教育6年次修了の証書がウィアンヘーン郡内の寺に付設された学校から発行されたことになっていることを突き止めただけでなく、それが偽造であったことを見破る。Aがこの事実をウィアンヘーン郡長に直訴したため、投票結果は無効になると同時に、公文書偽造の容疑でBへの逮捕状が発行された。Bはしばらく姿をくらましたが、Bを推していたカムナンは、常日頃郡長と折り合いが悪かったこともあり、郡長の辞任を求める抗議行動を起こした。平地のタイ人であるこのカムナンは、Bと結託することでL村のヤキャとのパイプを作り、L村近辺の森林資源の不法伐採や麻薬ビジネスにより深く絡んでいくことを画策していたと言われる。

■事例2

メーホーンソーン県パーイ郡内のP村は、平地の幹線道路沿いに発達した比較的大規模の大きな村であり、裕福な暮らしをしている世帯も少なくない。ただし、そ

の立地の良さゆえ麻薬流通ルートにおけるハブ村的位置にもあり、麻薬に関連したトラブルが多く逮捕者も頻繁に出ている。また、キリスト教への改宗率が低いタイ・リスのなかにあつては比較的多くのクリスチャン人口（全人口の4分の1程度）を抱えている。クリスチャンと非クリスチャンの間に目立った対立こそないものの、両者は幹線道路をはさんで異なった集落を発達させており、クリスチャン集落側の家屋の貧弱さやインフラの未整備具合が際立っている。

P村は地方統治形態法上の正規村で、90年代に入ってから人望のある村長（非クリスチャン）がしばらくの間村を治めていたが、時に威圧的な態度をとることのある彼は、一部の村民からは疎まれてもいた。ある時、そうした村民の一人が「村長は麻薬売買に関与しており、不法行為で多大な利益をあげている」と郡長に告げ口をする。その内容を吟味した結果、郡長は現職の村長を罷免し、P村は新たな村長を選出しなければいけなくなった。ただし、再び村民間の互選にすると村民人気の高い前村長が再選される恐れがあるため、郡長は超法規的に新村長を指名することにする。当初、告発者本人が指名を受けることを希望したが、「お前が就任したのではかえってこじれる」と郡長に諫められ、前村長と告発者のどちらのクランにも属さない第3者を立てるべきという判断から、*Likya*（漢族起源の李姓）の男性が新村長としての指名を受けた。しかし、その男性とてあまり人望はなく、村人は失望を隠しきれない。高校卒業の資格を持つある村人は次のように語った。

村長には、村が本当に必要とする事業を郡の会議で申請して予算を獲得し、県会議員や国会議員ともパイプを持って村へ多くの利益を誘導してほしいが、学歴のない今の村長にはそんなことは期待できない。その点、KS村（P村から30キロほど離れた山中深くの大規模村）の村長はいい。学歴も高ければ、国会議員のバックアップも受けている。村民の国籍問題や農地問題の解決にあたっても多大な貢献をしている。本当に羨ましい。

トラブルにのみ特化して語るのは視点としての公平性を欠くかもしれないが、それでも、この類の話が特にリスに多いという印象は拭えない。20年に及ぶタイ山地民社会との関わり合いのなかで、私はリス以外の多くのエスニック集団の村落を訪れたり調査したりする機会も得てきたが、むしろそうした印象は強まるばかりであった。参考までに、本格的なリスの調査に携わり始めた1993年以降現在までの村長絡みのトラブルや事件で、私自身が直接的に見聞して「事実として知っている」ものを数字として挙げておこう。

内訳としては、村長が在任中に殺害されたケースが3件⁶⁾、横暴な村長を呪術で殺そうとしたケースが1件（次章に詳述）、村長（候補者を含む）が麻薬売買、不

法伐採、公文書偽造等の不法行為に関わって逮捕状が出たケースが4件（1人は服役中、1人は服役後に証拠不十分で釈放、2人は失踪もしくは逃亡）、村長が郡長権限によって罷免されたケースが1件（上記事例2）、村長位をめぐるトラブルで村が二分され、通常は1つしかない守護霊の祠が新たに建設されたケースが1件、といった具合である。風聞程度の話であればさらに枚挙にいとまがない。次章では引き続き、あるリス村落の村長位をめぐる権力闘争の歴史を、より詳細なレベルで眺めてみたい。

IV 権力闘争の20年—S村のケース

1 S村

チェンマイ県メーテン郡に位置するT村は、1972年にチェンマイ県内の各地（主として現在のチェンダオ郡、ウィアンヘーン郡）からこの土地に移り住んだ10世帯ほどのリスの人々を開祖とする村である。海拔1,000メートル以上の土地を選ぶ傾向が強いリスの村としてはどちらかといえば異例な、海拔400メートル程度の低地にあり⁷⁾、平地タイ人（khon muang）の村に隣接している。村落用地の大部分はコン・ムアンの村民が使っていた農地を開祖のうちの4人の男性世帯主が1人1,000バーツずつ出し合って譲渡してもらったものであり、その後そこを基点に占有範囲を山側へ向けて広げていったようだ。ほぼ平地に降りてきたために、村落のごく近接地でのケシ栽培はできなかったが、やはり山側に深く侵入することで、移住後10年ほどは栽培を続けていたらしい。とはいえ、S村への移住は、焼畑移動耕作に基づくそれまでの絶え間ない移動生活に終止符を打ち、定住農耕による換金作物栽培へと移行することを意味していた。

現在では、主食である陸稲の栽培は細々と続けているが、かつてのケシ栽培は姿をひそめ、ライチや龍眼などの換金作物の栽培がそれにとって代わった。ただし都市部からそれほど遠くないために、事実上農業を捨て、町中で出稼ぎ賃金労働や民芸品の売買に携わる人々も多く、人口動態は非常に激しい。90年代初期までは村内は完全に未電化で、平地の幹線道路から村へ続く道も状態の悪い未舗装道路であったが、90年代半ばに急激に開発が進み、電化、道路の舗装化のみならず、電話線の開通、TV法送受信のパラボラアンテナの敷設などが次々と実現し、村民の生活様式も大きく様変わりした。調査開始当初は、大半の家屋が竹を割いて作った壁で木組みの構造を取り囲み、茅で屋根を葺いたもので、そこに混ざってごく僅かに木造トタン（もしくはスレート）屋根の家屋が散見される程度であったが、現在では茅葺きの家屋はすっかり影を潜めてしまった。コンクリートを床材、壁材にした近代的な家屋が飛躍的に増え、木造家屋がむしろ古びて見えるようになってしま

ったほどである。なお、S村は長い間隣のタイ人村の衛星村の地位に甘んじてきたが、紆余曲折を経てようやく2001年に正式に正規村へと分立することがなかった。

S村には、調査開始時(1994年)に84世帯486人のリスがおり、そこに14世帯56名のアカが村の一角や遊休地の一部を間借りするかたちで暮らしていた。それが現在(2007年時点)では村の外延の拡張と新規移住者の増加により、リスが102世帯、アカが32世帯にまで増え、人口もそれぞれ554人、164人にまでふくれ上がっている。リスやアカのほかにも、ラフ、ナシ・ラフ、ヘガ、雲南系漢人、ミエン、カレンなどが婚入女性、養子、移住者などというかたちで溶け合いながら暮らしており、その民族地図は実に複雑だ。

90年代当時の主要クランの内訳は、*Yakya* (楊):25世帯、*Likya* (李):11世帯、*Biapha*:10世帯、*Ngwapha*:7世帯ほかである。村の開祖にあたる10世帯ほどはすべて*Yakya*もしくは*Likya*に属す人々であり、今でもこの2つのクランが圧倒的に強い勢力を持っている。ただし、*Likya*が比較的均質的で内部でリネージに分化していないのに対し、最大派閥である*Yakya*は、*Miliya*、*Muyiia*、*Kwangkuya*という3つのリネージに分かれており、祖先祭祀のやり方も大きく異なるなど、相互に微妙な緊張感をはらんだ関係性にある。このうち開祖にあたるのは*Muyiia*に属す人々であるが、彼らにとっては、10年ほど遅れてS村に移住してきた*Kwangkuya*が、人口比上逆転してクラン内マジョリティとなり、村内政治の文脈でも幅を利かせていることが面白くない。なお、90年代の半ば以降、しばらくの間*Likya*の男性がカムナン(行政村長)助手および村長を務めてきたが、本論の冒頭で触れた2008年9月の選挙によってどの主要クランにも属さない新たな男性が村長に選出された。だが、新村長は元来はチェンマイ県内の別の村の出身者で、現在は*Likya*の妻方に身を寄せており、完全に*Likya*勢力に取り込まれているかたちである。

一方、S村では開村以来ながらくの間*Yakya*の*Muyiia*の男性がモム(祭司)を務めてきたが、2002年頃から体調を崩して職を退き、その後、*Likya*から新たなモムが選出された。ニパ(シャーマン)については、1994年時点で4人いたのが1996年に1人増え、現在は5人を数える。*Yakya*から2名(どちらも*Kwangkuya*)、*Likya*から2名、*Biapha*から1名という内訳である。

2 村長の座をめぐる攻防

次に、S村の村長位をめぐる権力闘争がどのようなかたちで推移してきたのかを整理しておこう。1972年の開村時から、はじめてS村に足を踏み入れた1993年(長期調査は1994年から)までの間の状況は伝聞でしか知ることができないが、1993年当時には、すでにその数年前から*Yakya*(*Kwangkuya*)の男性が形式的な村

長（地方統治形態法上の正規村長ではない）を任じていたことがわかっているため、現在にいたるまでのおよそ20年間の状況についてはほぼ把握できている。

まず、開村時から80年代の末ぐらいまでは、4人の土地購入者を中心とした数人が持ち回りでフワトゥを務めていた。そもそも協力して山野を切り拓いた仲間同士であり、土地の売買をめぐる小トラブルを除けば、さして大きな衝突などはなかったという。また、政府役人との交渉や近隣のタイ人らとの付き合いもさほど密でも頻繁でもなかったため、フワトゥとしての役割はあまり大きなものではなかった。

80年代の半ばを契機に徐々に状況は変わっていく。それには、国内の政治情勢の大きな変化が関わっていた。共産化した一部山地民と政府軍や国境警備警察との武力衝突は、反政府活動に従事した者らへの恩赦とそれに続く投降（1982-1983）で一気に雪解けムードに向かい、それに呼応したかたちで、政府は1985年から「山の獅子プロジェクト」（大規模な山地民人口調査）を発動し、最終的な国籍付与を視野に入れた山地民の実態調査に着手する。1990年からは実際に山地民に対して「高地民携帯証」と「準国民登録票（TR 13）」（1991～）を発行し、順次国籍に切り替えていく態勢を整え始めもした。一方S村には、武力衝突の収束を受け、1980年代の半ばごろから、ミャンマーとの国境地域で政府の傭兵をやっていたリスの男性らとその親族が大挙して移住してきていた。

その当時、S村には政府諸機関の関係者が多く訪れるようにもなっており、様々な交渉を有利に進めるためにも、タイ語に堪能で比較的若い村長が必要だという認識が高まりつつあった。そうした中で名乗りを上げたのがYakya（Kwangkuya）の30代の男性Kである。ただし、彼は村人の要請を受けたわけでも選挙で選ばれたわけでもなく、傭兵経験を背景とした威圧的な態度と親族の絶対数の多さで、周囲に有無を言わせなかっただけに過ぎない。Kはすでに1989年前後から村長を自任していたが、1993年になってようやく初めての村長選挙（非正規）がおこなわれることになった。Kに対抗して名乗りをあげたのが、開祖の流れを汲むモム（祭司）の息子Lである。Kと同じYakyaに属すが、両者のリネージ（K=Kuwangkuya、L=Muyiya）は相互にある種の緊張関係にあり、同一クランとしての一体感是非常に希薄であった。Lはむしろ、ツビ（tsubi 旧住民）と総称される人々による支持と、高校卒業の学歴と出家経験によるタイ社会の諸事への精通を武器に、ツシ（tsushi 新住民）に傾きかけている勢力地図を塗り替えようとしたのであった。しかし、選挙は120対80（有効投票数のみ）ほどの差で結局Kの勝利に終わる。

ある村人によれば、この勝利を境にKの増長が始まったという。些細なトラブルから旧住民のLikyaを銃で脅したと思えば、自らが豚をおろして売る予定だった

のが、アカの男性に先んじられて売れなくなった腹いせにその男性をなぶり者にし、さらには、伝統儀礼に関する深遠な知識で尊敬を集めるモムと新年祭の開催時期をめぐって意見を対立させ、最終的にはモムを恫喝して自分の意思を無理に押し通しもした。決定的だったのは、郡の警察署に頻々と出入りするKの姿を何人かの村人が目撃したことだった。当時のS村は警察による麻薬売買に関する抜き打ち捜査を度々受けており、その密告をしているのがKではないかと疑われたのである。これを機に、Kを排除したいと思う一部の勢力は秘密裏に会合を持ち、殺し屋を雇うべきか、呪術に長けた人物を探し出して呪い殺すべきかを度々相談し合った。

1995年11月、事態は急転直下する。常日頃Kを快く思っておらず、S村の状況を危惧していたカムナン（行政村長）が、S村から1名のカムナン助手を任命すると発表すると同時に、40代のLikya（李姓）の男性Pをそのポジションにつけたのである。これは明らかにKの権勢を無力化する意図をともなっていた。Kはフワトゥ（伝統的なリーダー）ではあってもプーヤイバーン（公認の正規村長）ではないため、少なくともタイ地方行政上の文脈では、公務員として月々の手当を受け取るPの立場がKのそれを上回るようになったのである。しかしながら、フワトゥは公職ではないために逆に解任のしようもなく、ここからしばらくの間は、S村内で2人の指導者が拮抗しあうことになる。ところが一定期間を経ると、村人の大半はカムナン助手に過ぎないPを指して「村長（プーヤイバーン）」と呼び始め、また当初はPを敵視していたKも、Pの背後にいるカムナンや郡長とまで対立する気概はなかったのか、徐々にPの一頭体制を容認していくようになった。また、温厚で調整型のPは村民の受けもよく、2000年のカムナン再選時にも再びカムナン助手を用命する。

これら一連の流れと並行して、2つの大きな出来事があった。ひとつは、1999年のタンボン行政機構（Ⅱ-2参照）の発足である。もっとも、通常の正規村であれば、これを機に村内から2名の評議員を選出する権利を持つのだが、S村にはまだその権利がなかった。いまひとつは、2001年のS村の正規村としての分立である。長年の悲願であったにもかかわらず、国籍取得者数の不十分さと麻薬取引の横行を理由に放置されてきただけに、認可の通知を受けた村民の喜びもひとしおであったようだ。これを機に、S村は2名のタンボン行政機構評議員（Yakya < Kwangkuya > 1名、Likya 1名）を選出すると同時に、初の正規村長を持てることにもなった。ただし、このときは、混乱を避けるために選挙は実施せず、郡上層部の判断でカムナン助手であったPが横滑りで村長に就任した。

Pは5年の任期を全うしたのち、2006年にも無選挙で村長に再任したが、2007年ごろから体調を大きく崩し、大がかりな外科手術を受ける。これを機にPが引

退を希望したこと、S村の村政が安定してきたことを受け、郡の上層部は、村史上初の村民間の互選による正式な村長選挙を2008年9月4日に実施することを許可した。

3 2008年9月4日

選挙当日、S村は朝方から特殊な雰囲気包まれていた。陰で結果を予想し合う人々の好奇の目、候補者に気を遣い、あえて普通を装おうとしながら却ってぎこちなくなる人々の態度、そして、事前の根回しに奔走した各陣営の思惑のすべてが絡み合い、あたかも空気が熱をはらんで膨張しているかのようであった。

選挙はまず、郡長命で選挙管理委員会を立ち上げるところから始まった。8月15日付で、委員長と書記には2人の副郡長がそれぞれ割り当てられたほか、1名のタイ人（農業奨励事務所員）と5人の村民（すべてリス）を含む6人の委員が任命された。続いて立候補の受け付けが8月17日から19日の間に行われ、*Yakya* (*Kwang-kuya*、新住民系)の42歳の男性Xと、*Likya*の妻（旧住民系）を持つ30歳の男性Yの計2名が登録を済ませる。Yは村外出身者であり、出自的にはS村のどの有力クラン（リネージ）にも属さないが、*Likya*である妻の一族の期待を一身に背負った出馬である。また、専門学校卒業の学歴と森林局で働いた職歴を持っていることも強みであった。8月29日、現職のカムナンが選挙への立会い命令書を郡長から受け取り、選挙の形式的な準備がすべて整う。

立候補の受付が済んでから選挙が実施されるまでの約2週間、選挙戦は水面下と水面の両面で繰り広げられた。水面下では型通りの中傷合戦があり、真偽の確認のしようはないが、両陣営が相応に大きな金額をばら撒いているというまことしやかな噂も多く流された。表立った行動としては、有力者の支持を獲得するための挨拶まわりと多数の選挙ポスターの貼りだしが主たるものである。今回の選挙において、挨拶まわりのやり方には両陣営に大差はないが、それぞれのポスターはとても対照的であった。Y陣営が極めてシンプルな「私に仕事をさせたいければ、どうか私を選んでください」という一文のみの惹句を選んだのに対し、X陣営は、以下のような詳細な公約をポスター上に提示した。

- 1) みなさんの国籍取得の後押しをします
- 2) 国王陛下の方針に従い、「足るを知る経済」を奨励します
- 3) 村内に協調と平和をもたらします
- 4) 村を麻薬禍から守り、若者たちにスポーツを奨励します
- 5) 職業としての農業と手工芸品製作、OTOP⁸⁾を奨励します
- 6) 民族の伝統と文化を奨励します

7) 観光を奨励し、村が恒久的な観光スポットになるよう導きます

これらの公約は、政府政策への配慮や村民のニーズの汲み取りが観察されるとても興味深いものであるが、一方で、先の惹句ともあわせ、こうした公共戦略がさほど大きな影響力を持っていたとは思えない。実際には、争点はただ1点に絞られていたといってもよい。それは、文字通りキャスティング・ボートを握る旧住民系の *Yakya* (*Muyiya*) の支持を、どちらの候補サイドが獲得するかであった。この選挙は、旧住民の *Likya* と新住民の *Yakya* (*Kwangkuya*) との争いという側面をもっているだけではない。前者が *Likya* である前村長の意思を受け継いでいるとすれば、後者は前村長に先立って「村長」を自任していた旧村長派の復権を志しており、双方が相譲れない立場にある。そうしたなか *Muyiya* 系の *Yakya* の人々は、同じ旧住民としては *Likya* 側からのアプローチを受け、同じ *Yakya* としては *Kwangkuya* 系の人々から熱い視線を送られるという両義的な文脈に置かれていた。渦中の *Muyiya* のある男性は、私に対して次のように耳打ちした。

自分は状況がどちらに転んでも差し支えがないポジションにいる。自分も *Yakya* なわけだから、*Yakya* の村長が就任すれば、それはそれでメリットがあるかもしれない。でも妻は *Likya* で、しかも候補者である Y は妻の義理の弟にあたる。どちらに投票するべきかは明らかだろう。

投票は午前8時から始まったが、最も緊張が高まったのが午後の2時過ぎ、自らの投票権を行使するために、偶然両候補者がほぼ同時に投票所に姿を現した時だった。会場付近にたむろしていた村民らの間には小さなどよめきが起こり、XとYが硬い表情で握手を交わす。

午後3時、投票が締め切られる。投票総数310。うち、投票用紙の破損もしくは記入ミスによる無効票が50、投票資格不保持者による誤投票が1、それらを引いた有効票数は259

で、結果は以下ようになった。

番号1 X: 125 票

番号2 Y: 134 票

翌日、新村長となったYの自宅で盛大な饗宴が催された。形式上はYのための招魂儀礼 (*tsohakfuwa*) というかたちをとり、招魂を手助けする精霊に供儀獣 (豚) を捧げ、最後に聖糸 (*libitsa*) をYおよび参加者の首に巻きつけて縛魂す

る。そして、それに饗宴が続く。しかし、この儀礼の開催は明らかに勝利宣言であると同時に、Yの裕福さと気前の良さを村民に示すための極めてリス的なパフォーマンスでもある。そのため供犠獣となった豚には、100人からの人々をもてなすことが可能な大柄な2頭が選ばれ、単価が高く、村民が最も好むビールが大量に振舞われた。投じた費用も5万パーツは下らない。宴席には、副郡長、カムナン、選挙管理委員の各面々、保健所職員はもとより、村内の多くの重鎮、親族が顔を揃えたが、人々が最も関心を持ったのは敗北したXの対応である。「無効票が50票もなければおそらく勝っていた」というのがX陣営の見解であり、釈然としない気持ちを抱えたままのXが、そもそも宴席に現れるかどうか自体に注目が集まっていた。

はたしてXは来た。それを迎えるYも丁重な態度をとり、居宅の目の前に設置された主賓席にXを招き入れる。Yは、タンボン行政評議会の評議員経験もある年上のXをたて、彼の助力失くして村政は立ちいかないといったことを縷々述べたが、Xは少しずつ酒をあおりながら、Yの話を終始無然とした表情で聞いていた。それでも小一時間ほどはいたろうか。Yはゆっくりと腰を上げ、自宅へと歩を向けた。

V 考察

「リスの村長は殺されやすい」という命題を検討する時、それをリスがリスであるゆえに「真」であるとするタイプの循環論法に陥ることは避けなければならない。少なくとも、同命題をリスが先天的に内在させる気質のようなものと関連付けるのは誤りである。が、それをリスの人々がつくりあげてきた歴史的、社会的な相互作用の中での蓋然としてとらえるのなら話は別である。隣接諸集団に比して相対的に深やかにみえる麻薬ビジネスへの関与と、大規模な経済的利益が絡むがゆえに生じる嫉妬や憎しみ。ある程度明確に分節しつつも階層化を拒んできたクランやリネージと、その存在ゆえに起こりやすい相互の摩擦や対立。多くの研究者が必ずと言ってよいほど言及する競争原理と、それを裏打ちする優越思想。そこに地方行政という外部からの強い負荷がかかり、フワトゥとプーヤイバーンの立場が錯綜する時、その蓋然的な帰結のひとつが「村長の殺されやすさ」であるとするのは、あながち突飛な空想ではないように思える。

しかしながら、希薄な根拠のみでこれ以上このことを議論の俎上に載せるのは控え、残りの紙幅では、冒頭で問題意識として触れた、村長位のはらむメリットと媒介性、および村長位にまつわる権力の構図の変化（不変化）という軸にそって、ごく簡潔にこれまでの議論を整理してみたい。

まず、村長であることのメリットについては多言を要しないだろう。それはやはり「金」と、それに付随する「名声 (mydu)」に帰着する。より厳密に言えば、金銭的な利益や権力の確立につながる制度や人間関係とのパイプの構築こそが、村長へ就任することからくる危険や煩雑さといったリスクを背負いながらも獲得したいメリットに他ならない。そして、それはリスの村長というポジションが持つ媒介性と表裏一体なものでもある。まず、農作物や森林資源、労働力といった内的なリソースを外部へ媒介するのに最も有利な立場にいるのも村長であれば、国籍の取得や土地の登記といった制度的恩恵、政府や私企業を通じた様々な給付金、助成金、開発資金などの外部リソースを内部へ媒介しうるのも村長であることが多い。このとき、いわゆるコンプライアンス精神に乏しいタイ地域政治の文脈においては、媒介者にはなにがしかの見返りがあるのも普通である。村長になれば自動的にこうした権益にあずかれる訳ではないが、一定の才覚さえ発揮できれば、大きな富を蓄積することも十分に可能となる。

ここで注目したいのは、不法行為や個人による突出した富の蓄積は、周囲の嫉妬や羨望を呼び起こしこそすれ、リスのローカルな文脈では倫理に抵触する行為としては捉えられないということである。デュレンバーガー [1989: 115-116] はかつて、「(リスにとって) 名誉と権力とは同一のものである。人は、それらを富に依拠した気前の良さと諸々の義務の遂行によって手に入れる」と述べると同時に、「義務の遂行」を端的には儀礼の執行により人々に自らの富を還元することだとした。また、こうしたイデオロギーにおいては、義務の遂行がその前提となる手段に優先され、通常の意味での倫理的尺度を適用することができないとも言う。換言すれば、問題となるのは富の入手経緯や違法性ではなく、その用途だということになるうか。デュレンバーガーやドゥッサンが描く 60 年代から 70 年代にかけてのリス像には戸惑いを覚える部分も少なくないが、上記のようなイデオロギーは現代のリスにも十分に観察できる。

事例中ではあえて触れなかったが、S 村の新村長 Y は、かつて麻薬売買の現行犯で逮捕されたことがあり、3 年間ほどの服役経験を持っている。そして、村の誰しものがこの事実を知っている。これは、地方統治形態法第 12 条に定められている村長の要件である、「森林法、国立公園法、薬物法などに抵触する行為を行い、それにまつわる判決を受けたことがない」(第 11 項) という条項に完全に抵触しているが、対立候補であった X を含め、このことを取り沙汰するものは誰一人としていなかった。権力を担保するものは、ここでもやはりその確立の経緯ではなく、蓄積した富の還元にあると考えてよいだろう。当選翌日に Y がすぐさま饗宴を主催したのも、来るべき権力の座への確実な布石にほかならない。

では、S 村に限って見た場合、過去 20 年の間に権力の構図はどのように変化

し、またどのように変化に抗ってきただろうか。3点に絞って整理してみる。

①世帯の卓越性からクラン（リネージ）の卓越性へ

ドゥサンが、1970年代のリスの村内におけるもっとも重要な協働単位をクランやリネージではなく、ランダムな「相互依存集団」(allegiance group)とみていたこと(Ⅱ参照)、ヨンソンが「リスの村長は殺されやすい」という命題を世帯の中心性をめぐるある種の修辭と看破したこと(同前)に鑑みても、かつてのリスの村落内での同姓集団のプレゼンスはさほど大きなものではなかったのかもしれない。開村当時のS村においても、状況は似たようなものであった。複数のクランがほぼ同時に移住して村を築きあげ、新住民の移住開始まではクランを軸とした対立などとは無縁だったようである。現在にいたるまでの、旧住民のYakyaとLikyaの相互的な親近感もそうした時代の名残であろう。ただしそれは、当時のリスの人々の世帯を中心とした高い移動性による部分が大きく、40年近くの定住化の歴史を持つS村では、世帯の中心性はクランの求心性へと顕著に統合されている。出自上はYakyaにもLikyaにも属さない新村長が、Likyaの意思を体現するかたちで選挙にかつぎ出されたのは見た通りである。

②法的な認知の重視から経済的アクセスの重視へ

S村民の大半が無国籍者で、政府による強制退去命令と土地の接収を恐れていた90年代までは、人々は何よりも一般のタイ国民と同じスタートラインに立って国家に参画することを望んでいた。80年代末から90年代半ばにかけて暫定村長として君臨したKが人々に疎まれたのは、自己の権力の暴力的誇示を好んだがゆえのみならず、カムナンとの信頼関係すら確立できず、必要な外部との政治的パイプを一切持たなかったからにほかならない。その後カムナン助手として実質的な村長職を務めたPは、調整型のリーダーで村内への資本誘導を得意にこそしなかったが、在任期間中に村内の国籍取得者数を大きく増やしたほか、村内政治の安定をもたらした功績で長らく支持された。

だが、政府による法的な認知が第一義的な優先事項ではなくなった現在、多くの村民にとっての最大の関心事は、家内経済の充実化に移っていった。かといって、S村が「平均的なタイ国民の村」として地域の風景に埋没していったと考えるのは早計である。リス(山地民)を長らく法的な宙づり状態に置いたまま政権交代を繰り返す国政は、国家による積極的な保護に期待しない冷めた視線⁹⁾を生み出しただけでなく、富への積極的なアクセスの個人化を促し、人々を一般のタイ人をはるかに凌ぐ貪欲さに駆り立てた。麻薬のみならず、国籍取得の違法仲介等を含むあらゆるリソースの現金化が競い合われ、村内には再び疑心暗鬼な空気が満ち溢れた。2008

年のYの当選は、2大有力クラン間の政治的駆け引きの帰結でもあったが、一方で、そうした閉塞状況に風穴をあけうる手腕を買われてのことかもしれない。

③権力の表現形式の不変性

変わらない、あるいは変わらない部分もある。正規村に昇格しようとも、消費社会の末端に組み込まれようとも、個々人にとっての富や権力へのアクセスの方法がいに多様化しようとも、S村における権力の最も分かりやすい表現形態は今なお儀礼（饗宴）のかたちを取り続けている。富の蓄積自体は、大家屋の建築、高価なピックアップトラックの購入、妾宅との往復などを通じて表現できるが、それを権力へと転化させる「正しい」方法論は、今日に至るまで儀礼の執行である。豚とビール（酒）に象徴される富の再配分は、リスとしての従来のアイデンティティと、消費社会の一員としての新たな（しかし無自覚な）アイデンティティとを矛盾なくそこに同居させうるもののなのだろう。だが、権力の表現自体は一種の閉鎖性のもとに変わらずとも、表現が可能な個人の絶対数は、富へのアクセスの不均衡にともなって確実に減っている。そう考えると、村長になるための潜在的要件には当然儀礼の執行能力も含まれることになるし、また実際に、周囲によるその評価が投票行動を見えない部分で左右しているとも思える。

VI おわりに

ここまでの議論からも、「村長」という職位がタイ・リス社会の変化を同定するための尺度としていかに有効であるかは明らかであろう。タイ地方行政における村長位は、文言化された法律を背景とした可視的な従属変数であり、いかに多くの独立変数が複雑に絡み合おうが、最終的には制度的な枠組みの中に収斂していかざるをえない。そしてそれだけに、質的な変化を追やすい。本論もまた、その過程を捕捉することを試みてきたつもりである。

では、人々が村長になることに固執し、その地位をめぐる争いを繰り返すことの意味を、種々のメリットという現実的なレベルを超え、小さな権力と大きな権力との接合というより大きなレベルで捉えなおしたとき、最終的には何が言えるだろうか。

これはおそらくは、世界各地のマイノリティ社会と国家権力との関係性をめぐって繰り返されてきた議論との相似形でもある。ただし私は、こうした事柄をマイノリティ側の視点から論じる上で用いられてきた「適応のための戦略」、「しなやかな抵抗」、「流用」といったレトリックについては、その重要性を認めるにやぶさかではないものの、一方で一抹の物足りなさも感じてきた。「戦略」は行為主体の恣意

性と積極性を過度に表現しているように感じるし、「しなやか」や「流用」には抑圧されてきた側のイメージの毀損を嫌った必要以上の称揚が見て取れなくもない。マジョリティの社会と同様に権謀術数が渦巻き、麻薬や殺人や詐欺が横行するマイノリティ社会の現実に蓋をする行為のようにも思ってしまうのである。

これを踏まえて言うなら、少なくともタイ・リスについて現在私が感得しているのは、人々による「尖鋭的分節」の志向である。国政への失望は、人々が周縁で生きていくための遅さを涵養すると同時に、平等主義的な政治体系のほころびと相俟って、特定の個人が富や名声を独占する余地を生みだす。だが、リスとしての共同性に軸足を置いたままのそれは、分離ではなくあくまで分節である。他方、リスの社会的文法にあっては、富の寡占は人々へのその還元を伴ってこそ権力として結晶化するため、権力を志向するリスは、外部のリソースを内部に導入するためのパイプを持つ必要に迫られる。これはいわば、単なる先鋭化にとどまらない「媒介的分節」でもある。

尖鋭性と媒介性をあわせ持つ村長が誕生する時には、村政にも政治的平衡がもたらされやすい。しかし、村長が媒介性をないがしろにしたまま尖鋭性に走る時には、暴力的なサンクションが胎動をはじめのかもしれない。

注

- 1) しかしながら、「先住民」といった場合には東北部や南部の諸マイノリティ集団、ごく近年になってからミャンマーなどから入ってきた移民集団などをも含むため、本論ではあえて「山地民」という呼称を便宜上踏襲することとした。
- 2) リスは、タイ山地民のなかでもかつて最大級のケシ栽培民だった。80年代のクルッカー〔Crooker 1986: 246〕の調査によれば、主要6民族（リス、モン、ヤオ<ミエン>、ラフ、アカ、カレン）のうち、ケシ栽培に従事している村落の絶対数（60カ村）でラフに続いて2位（栽培率では67.4パーセントで1位）、1世帯あたりの耕地面積は0.79ヘクタールでモン、ヤオに続いて3位、1人あたりの耕地面積は、0.09ヘクタールでヤオに続き2位（モンと同値）という結果が出ている。現在ではアヘンやヘロインに代わって覚醒剤（メタンフェタミン）の売買が主流となっているが、そこでもリスのプレゼンスは小さくない。
- 3) タイ山地民のなかの一エスニック集団
- 4) こうした人物はけっして少なくなく、なかには北部タイ出身の現職の大臣と深い関係の構築に成功して権勢をふるったリスの村長すらいたが、タイ・メディアににざわしたリスの「麻薬王」のなかで最もよく知られているのがラオ・ターである。元来漢族であるラオ・ターは、国民党の残党としてタイに入った後、リスの村で3人の妻を得て暮らしてきたが、長らくの間、汚職摘発委員会や麻薬取締局によってその罪状を探られていた。なかなか証拠が挙がらないことに業を煮やした政府は、1999年8月、フル装備の国軍を出動させてリス村落内にあるラオ・ターの自宅の強制捜査に着手。麻薬こそみつからなかったものの、少量の武器弾薬を押収して強引に立件す

る。当時の首相チュアン・リークバイが、ラオ・ターの早期逮捕を促す異例の声明をメディアを通じて発表している。その後検察は、証拠不十分を理由に基礎を撤回し、ラオ・ターは釈放された。

- 5) 「仏暦 2540 (1997) 年憲法」は、「国は、地域住民の意思に基づく自治の原則に基づき、地域の独立性を保障しなければならない (第 282 条)」、「自治が可能な状態の地域は、法律の規定に基づき、地方自治機関を設置する権利を有する (第 283 条)」(タイ経済パブリッシング 1997: 103) と明記しており、これにより地方自治確立の動きが全国的に活発化していく。まず、1995 年 3 月 2 日以降法の効力をもっていた「タンボン評議会およびタンボン行政機構法」の移行期間が終了し、1999 年 3 月 2 日から本格的実施行へ入ったほか、2000 年には、すべての「衛生区 (スカービバーン)」が自治性の強い「市 (テーサバーン)」へと昇格した。前者は、1971 年以来廃止されていた「タンボン行政機構 (オー・ボー・トー)」を改善したうえで久々に復活させたもので、行政村長 (カムナン) の政治権力を牽制し、予算を審議する権限を持った行政機構を別個に設けたところに意味を持っていた。また、この法律により、各行政村は独自に地域の法人や営利団体から税金を徴収することができるようにもなった。金権政治にまみれていたタイの地方行政は、政治的権力と予算の決定権を分離させたこの法律のために騒然とし、今度はタンボン行政機構の機構長と委員の席をめぐる利権争いも各地で起こる。そして、このような一連の動きは、山地民村落にも少なからぬ影響を及ぼしていく。
- 6) このうちの 1 件は、2003 年度に当時のタクシン首相がメディアを通じて全国の麻薬ディーラーに宣戦布告をしたいわゆる「麻薬撲滅戦争」の災禍で命を落とした、チェンライ県メーサローン地区のリスの村長および副村長のケースである。『サヤムラット』誌 (2003 年、第 50 巻 32 号) はこの「戦争」における使者の総数を 2,291 人と伝えており、その大半が山地民であると言われている。なお、死亡した 2 人は警察官による超法規的措置によって暗殺されたと考えられており、ある NGO は、シャドウレポートを通じてこれを人権蹂躪の事例として国連人権委員会に報告している。
- 7) チェンマイ県の中心であるチェンマイ市自体の海拔が 300 メートル強であるため、S 村はほぼ平地に位置すると考えて差し支えない。
- 8) 日本のそれを模倣して始めたタイ版「一村一品運動」で、One Tambol One Product の略称。
- 9) 2006 年 9 月のクーデターによって時のタクシン政権が転覆されてから約 1 年の後、2007 年 8 月 19 日には暫定軍事政権による憲法原案の可否をめぐる国民投票が実施され、賛成が反対をわずかに上回って可決された (有効投票数: 25,978,954、賛成: 14,727,306<57.61%>、反対: 10,747,441<41.37%>、無効: 504,207<1.94%>)。ただし、タクシンのお膝元である北部タイ地域の平地農民は、その多くが暫定軍事政権への不支持を表明し、同憲法原案にもこぞって反対していたと言われる。S 村が含まれるタンボン内の諸村においても、平地農民の村々では圧倒的に反対票を投じた人が多かった。一方 S 村では、有権者 428 人のうち 281 人が投票に参加し、145 対 131 で賛成が反対を上回った。タクシン政権になってから特に対山地民政策が悪化したというわけではなかったが、タクシン首相のエスニック・マイノリティへの無関心ぶりはよく知られており、それが投票行動を左右したとも考えられる。いずれにせよ、同一のタンボンであるにもかかわらず、タイ系平地農民の村落とリスの村落との間に大きな差があったことは注目に

値しよう。

参考文献

赤木攻

1994 『タイ政治ガイドブック』 Meechai and Ars Legal Consultants.

綾部真雄

2007 『タイ北部山地民リスにみるエスニック・アイデンティティ—国家原理を通じた再編成—』(2006年度東京都立大学社会科学科提出学位<博士>請求論文)。

2008 「エスニック・セキュリティ—タイ山地民リスにみる内発的安全保障のかたち—」『社会人類学年報』34: 51-91。

Crooker, R. A.

1986 *Opium Production in North Thailand: A Geographical Perspective*, University Microfilms International.

Dessaint, A. Y.

1971 "Lisu Migration in the Thai Highlands", in *Ethnology* 5 (3): 329-348.

1972 "The Poppies are Beautiful This Year, in *Natural History* 81: 30.

Dessaint, A. Y. and W. Y. Dessaint

1992 "Economic Systems and Ethnic Relations", in *The Highland Heritage: Collected Essays on Upland North Thailand*, Walker, A.(ed.), Suvarnabhumi Books, pp.95-110.

Durrenberger, P.

1976 "Law and Authority in a Lisu Village: Two Cases", in *Journal of Anthropological Research* 32 (4): 301-325.

1983 "Lisu: Political Form, Ideology and Economic Action", in *Highlanders of Thailand*, McKinnon, J. and Wanat Bhruksasri (eds.), pp.215-226.

1989 "Lisu Ritual, Economics, and Ideology", in *Ritual Power, and Economy: Upland-Lowland Contrasts in Mainland Southeast Asia*, S. D. Russel (ed.), Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University, pp. 103-120.

1996 "Blessing in Lisu Culture and Practice", in *Merit and Blessing in Mainland Southeast Asia in Comparative Perspective*, Kammerer, K. A. and N. Tannenbaum (eds.), Yale University Southeast Asia Studies, pp.116-133.

Forrest, G.

1908 "Journey on Upper Salwin, October-December, 1905.", *Geographical Journal* 32: 239-266

Hanks, J. R. and L. M. Hanks

2001 *Tribes of the North Thailand Frontier*, Yale University of Wisconsin Press

Hutheething, O. K.

1990 *Emerging Sexual Inequality among the Lisu of Northern Thailand: The Waning of Dog and Elephant Repute*, Brill.

Jonsson, H.

- 2005 *Mien Relations : Mountain People and State Control in Thailand*, Cornell University Press.
- Kirsch, A.T.
- 1973 *Feasting and Social Oscillation : Religion and Society in Upland Southeast Asia*. Cornell University Southeast Asia Program Data Paper, no.92, Southeast Asia Program, Cornell University.
- Lewis, P. and E. Lewis.
- 1984 *People of the Golden Triangle*, Thames and Hudson.
- Prasert Chaipigusit
- 1989 "Anarchist of the Highlands? A Critical Review of a Stereotype Applied to the Lisu", in *Hill Tribes Today*, Mckinnon, J. and B. Vienne (eds.), White Lotus., pp.173-190.
- Rose, A and C. Brown
- 1911 "Lisu (Yawin) Tribes of the Burma-China Frontier", *Memories of the Royal Asiatic Society of Bengal* 3 : 249-276.
- Seidenfaden, E.
- 1967 *The Thai Peoples*, Bangkok : The Siam Society.